

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520769

研究課題名(和文) 遼東半島土器編年からみた弥生開始期の実年代研究

研究課題名(英文) A research of dating of the beginning of Yayoi period viewed from the chronology of pottery in the Liaodong Peninsula

研究代表者

宮本 一夫 (Miyamoto, Kazuo)

九州大学・人文科学研究科(研究院)・教授

研究者番号：60174207

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：1941年、日本人研究者によって調査された中国遼東半島の上馬石貝塚の遺物実測や写真撮影を行い、発掘調査報告書を刊行するための基礎作業を行った。調査地点や層位関係を基に、出土土器の相対的な年代関係を、型式学的に明らかにした。これにより、遼東半島新石器時代から初期鉄器時代までの、ほぼすべての土器編年を明らかにした。そして、B区が遼寧式銅剣段階であることを明らかにし、その実年代が西周後期から春秋期にあることから、弥生開始の実年代が前8世紀にあることを検証した。さらに、土器の圧痕分析や土器製作技術の分析から、無文土器時代の文化内容が遼東に起源することを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：We drew pictures and took photos about materials of Shangmashi shell midden site excavated by Japanese scholars in 1941 in order to publish the excavation report. The relative chronology was typologically researched based on the excavation trench location and the layers in excavation. Therefore we would make a full chronology from the Neolithic Age to the beginning of Iron Age in the Liaodong Peninsula. The B2 area of Shangmashi site is proved to date from the late Western Zhou dynasty period to the Spring Autumn period. This dating can be confirmed that the beginning of Yayoi period dates to 8 century BC. In addition, the analysis for the kernel stamps of pottery and the analysis of technology for making pottery indicate that the beginning of the Mumun culture in Korean Peninsula originated from the late Neolithic in the Liaodong area.

研究分野：考古学

科研費の分科・細目：3305

キーワード：上馬石貝塚 上馬石上層文化 遼東半島 弥生開始年代 無文土器文化 土器圧痕分析 遼寧式銅剣文化

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、これまで東北アジアの考古学研究を中心に、日本列島の縄文から弥生時代を、東アジア全体の歴史的動向の枠組みの中に納めながら、その歴史的解釈を探ってきた。それを行うにあたって、時空軸の枠組み作りのために、東北アジアの土器編年研究や青銅器編年研究を進めてきたところである。そのような東北アジアの編年研究を推進するにあたって、遼東半島は最も重要な地域であり、山東半島と遼東の接点として、文献や文字資料をもつ中国中原地域と東北アジアを繋ぐことが可能な地域である。さらに、本地域は中原の年代軸と相対的な平行関係を確立するために最も地の利を得ているとともに、考古学的な遺跡資料が豊富な地域である。

2. 研究の目的

その中でも重要な遺跡資料として、上馬石貝塚の資料が挙げられる。この資料は、1941年に梅原末治や澄田正一らを中心に発掘調査されたものであり、戦後京都大学において保管されていた。この資料は幾つかの地点と層位に分けられるとともに、遼寧式銅剣を模した骨剣が出土するなど、問題の紀元前2千年紀終末から1千年紀の土器編年を行うにおいて重要な資料である。しかしながら、これまで正式な報告書が刊行されておらず、断片的な資料を基に議論がなされている。また、今日の土器編年再考にあたって、これら断片的な資料によって議論が展開されている。そこでこの膨大な発掘資料を再整理し、その報告書を完成させることにより、遼東の土器編年の再構築を目指すとともに、弥生時代の実年代に関して、遼東半島土器編年や東北アジアの土器編年の側から追究することにした。

3. 研究の方法

上馬石貝塚は、A地点からD地点まで調査地点が分かれており(図1)、またA地点やD地点では間層を挟んで上下層に分かれている。これら地点別、あるいは層位別資料の資料実測を行い、型式学的な比較を、地点別、層位別に行い、土器編年を作成する。土器・石器資料は、木箱で30箱以上に及ぶが、これら資料をなるべく多く実測し、発掘報告書として公開する。この基礎的作業には、九州大学考古学研究室の大学院生・学部学生があたり。

さらに遼東半島長山列島の上馬石貝塚遺跡踏査を行い、遺跡の現況から発掘調査当時のトレンチの位置関係や層位的関係を現地地形から再調査し、報告書作成の基礎材料とする。また、土器資料の表面に残る植物種子の圧痕をシリコンSEM法によって分析し、生業復原の資料とする。特に稲作の伝播問題に対する新たな証拠を探索する。さらに石器の金属顕微鏡などによる使用痕分析を行い、石

器の使用法や生業活動の復原を行う。このように、報告書は単なる土器編年の内容以外にも、総合的な遺跡の評価を行うような研究になるように努力した。

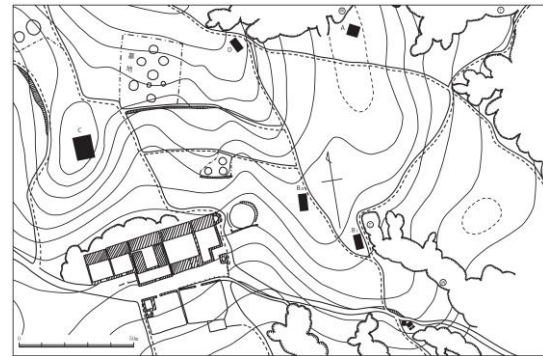


図1 1941年上馬石貝塚調査地点

4. 研究成果

2011年の現地踏査においても、その遺跡の遺存状態が良いことが判明し、発掘調査日誌との照らし合わせにより1941年調査時の調査地点をおおよそ把握することができた。そして、調査地点や調査地点内での層位関係により、出土土器の相対的な年代関係を、型式学的に明らかにした。まず、表1に示すように、地区ごとあるいは層位ごとに土器型式の存在が異なっている。そして、その各地点・各層位の土器型式を比較し、型式変化の連続性を読み取ることにより、以下のような相対的な順番が明らかとなった。

表1 地区・層位別土器型式

	A区		B区	B II区	C区	D区		西南崖	東南崖
	下層	上層				下層	上層		
小珠山下層			○	△		○			
小珠山中層									△
偏堡			△				△	○	
小珠山上層			○		○		△		
双輪子	1期			△	○		○		
	2期								
	3期								
上馬石上層	A区下層	○							△
	A区上層		○						△
尹家村上層				○	○				△
					△				

それによれば、D区下層→東南崖→西南崖→B区(C区の一部)→D区上層(C区の一部)→A区下層→A区上層→B II区(C区の一部)の順に相対的な一括遺物の順番が明らかになった。これにより、遼東半島新石器時代の小珠山下層から初期鉄器時代の尹家村上層まで、新石器時代の呉家村期を除き、すべてが存在することが明らかとなった。特に、西南崖にみられる新石器時代の偏堡類型の存在とともに、青銅器時代の土器型式の細分が可能になった。青銅器時代の上馬石上層文化は、A区下層→A区上層→B II区の相対的な順番に問題ないことが示された。

こうした遼東半島の新石器時代から初期鉄器時代までの土器編年の確立は、東北アジアの土器編年や実年代を考えるに当たって重要な要となるものである。さらに、遼東編

年から山東半島土器編年を介して中国中原地域との平行関係を明らかにし得る。同時に、遼東半島と韓半島土器編年との平行関係を明らかにできたのである。それは、韓半島と北部九州の相対的な平行関係が確立している今日にあって、弥生時代開始期の東北アジアの土器編年上の相対的な平行関係を明らかにし得たのである。すなわち弥生早期平行期である韓半島南部の先松菊里期が、遼東半島の上馬石貝塚BⅡ区に平行することが明らかとなったのである。そして、上馬石貝塚BⅡ区が遼寧式銅剣段階であることを骨剣や鋳型の存在から裏付け、その実年代が西周後期から春秋期にあることを明らかにした。この年代関係からすれば、弥生開始の実年代が前8世紀にあることを改めて検証したことになる。

さらに、土器の製作技術に着目すると、朝鮮半島の無文土器や日本列島の弥生土器などに見られる土器製作技術が、遼東の偏堡類型（三堂1期）にあることを突き止めることができた。それは、幅広の粘土帯の外傾接合、刷毛目調整の存在（図2）などを根拠とするものである。すなわち、朝鮮半島の新石器時代や日本列島の縄文時代とは異なった土器製作技術の起源が、遼東半島の偏堡類型にある可能性が高まったのである。

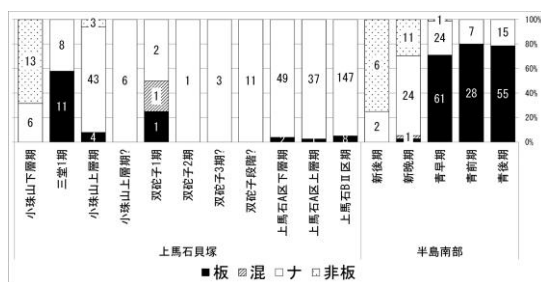


図2 刷毛目調整の存在

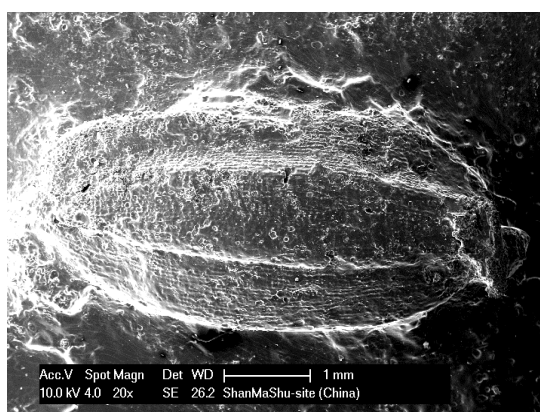


図3 コメの圧痕

また、土器の植物種子圧痕分析からは、遼東における農耕作物の時代的な変化を明らかにすることができた。これによると、新石器時代後期の偏堡類型からアワなどの雑穀が認められ、青銅器時代になるとこれにコメ（図3）とダイズが加わることが明らかとなった。青銅器時代のコメは山東半島からもた

らされたものである。従来、遼東半島の大嘴子遺跡の双砦子3期文化段階から炭化米などが出土していたが、この土器圧痕分析でも、その内容を追跡した成果が示された。なお、広鹿島の小珠山遺跡からは、小珠山下層の住居や文化層から炭化アワが出土しており、本来アワ栽培は小珠山下層段階から始まっていた可能性である。但し、上馬石貝塚の小珠山下層土器からは、アワの圧痕は発見されていない。

上馬石貝塚で出土した石器の分析や石器の使用痕でも明らかのように、朝鮮半島の無文土器社会や日本の弥生社会は、生業的には山東半島を起源とする稲作農耕文化にあることを再確認した。しかしながら、朝鮮半島無文土器時代の土器作りなど基本的な生活習慣は遼東の偏堡類型にあるように、無文土器時代の文化内容は遼東に起源することが明らかとなったのである。したがって遼東起源とする文化に、生業的には山東から遼東半島に流入した水稻農耕文化を基本とした朝鮮半島無文土器文化が生まれ、これが日本列島の弥生文化の基層となったことが理解されるに至ったのである。

なお、平成26年度科学研究費研究成果公開促進費に本研究が採択され、研究成果が『遼東半島上馬石貝塚の研究』題して九州大学出版会から出版される予定である。これによって、本研究の当初の目的であった1941年に発掘された上馬石貝塚の発掘調査報告書を作成することができ、その資料の公開が可能となるのである。ならびに、資料の公開という国際社会における社会的な責務を果たすことができるであろう。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

1. 宮本 一夫、沖縄出土滑石混入系土器からみた東シナ海の対外交流、史淵、査読無、第151輯、2014、63-84
2. 宮本 一夫、楽浪土器の成立と拡散—花盆形土器を中心として—、史淵、査読無、第149輯、2014、1-30
3. 宮本 一夫、弥生移行期における墓制から見た北部九州の文化受容と地域間関係、古文化談叢、査読有、第67集、2012、147-177
4. 宮本 一夫、遼東半島四平山積石墓研究、考古学研究、査読無、(九)下冊、2012、612-637
5. 宮本 一夫、九州地域の支石墓、季刊韓国の考古学、査読無、第18号、2011、52-61

〔学会発表〕（計4件）

- 宮本 一夫、従上馬石貝塚遺址来看東北亜農業、農業起源与伝播国際学術討論会、2014年10月19日、山東大学、済南、中国
- Kazuo Miyamoto, Reconsidering Modes of Contact between the Northern Chinese Bronze culture and those of Southwest

China, SAA, 2014. 4. 7, Hawaii, USA

宮本 一夫、東北亜早期農業伝播的四階段理論、山東大学文化遺産研究院成立暨考古学専業 40 周年慶典、2012 年 5 月 5 日、山東大学、濟南、中国

宮本 一夫、東アジアにおける日本の農耕の起源、農耕の起源、2012 年 3 月 17 日 立命館大学、京都

〔図書〕(計 3 件)

宮本 一夫 他、九州大学出版会、遼東半島上馬石貝塚の研究、2014、384

Takahiro Nakahashi, Kazuo Miyamoto etc., Kyushu Daigaku Shuppan-kai, Ancient People of the Central Plains in China, 2014, 278

高倉 洋彰、宮本 一夫 他、学生社、AMS 年代と考古学、2011、237

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

○取得状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

取得年月日 :

国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

宮本 一夫 (MIYAMOTO Kazuo)

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号 : 60174207

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号 :

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号 :